

本年七月、ヒマラヤ山麓の人口七〇万人程度の小国ブータンで第二回総選挙が実施された。これまで下院の九五％の議席を獲得していた与党が逆転されて三二％に転落し、政権が交替した。直接の原因は選挙直前に首相が中国の首相に将来の外交関係について交渉するような意向を表明したことに隣国インドが反発し、ブータンへ輸出している灯油を値上げしたために、国民の家計に直接の打撃となったことである。しかし、より重要な背景は通信手段の普及である。ブータンでは長年、テレビジョン放送の受信とインターネットの利用は禁止されていたが、賢王として名高い先代国王が一九九九年に解禁し、二〇〇三年には携帯電話も利用可能になった。それから短期で首都にインターネットカフェが登場し、携帯電話は一気に国民の七〇％にまで普及し、二〇〇八年には日刊新聞も発行されるようになった。

その結果、今回の選挙では両党ともフェイスブックやツイッターで発信し、従来と比較すれば、迅速かつ大量に国民に情報が伝達されるようになり、選挙にも影響をもたらしたと推測される。これは国民の行動にも変化をもたらしている。二〇一一年にブータン東部の寒村を訪問したが、わずか一〇戸ほどの集落の半分が空家になっていた。放送される都会の魅力に誘引され、若者が都会に出奔してしまった結果である。

ある雑誌に、幸福国家ブータンの少女に幸福の実感を質問したところ、八点という返事であったので、不足の二点の理由を再度質問したところ、韓国に誕生しなかったからという返事であったという記事が掲載されていた。連日のように放送される韓国番組の影響である。それまで海外情報には無菌状態であった人々が一気に感染している状況を明示している逸話である。

このような一国の情報公開の問題のみならず、最近ではウィキリークス問題やスノーデン問題など秘密情報を暴露する世界規模の事件が頻発しているし、各国のテレビジョン放送などでは、政治から経済、さらにはスポーツから芸能まで暴露合戦が盛況である。それは人々の一時の興味を満足させるかもしれないが、膨大な情報が興味本位で公開されていく結果、国家や社会の維持にとって不利な状況も発生している。そのような時期に、日本では特定秘密保護法案が成立した。賛否が渦巻いたが、この法律の影響の判断は容易ではない。戦後五〇年近くアメリカとソビエトが冷戦構造を維持してきた。あくまでも比較の程度であるが、前者は情報公開社会、後者は極端な秘密主義社会であった。前者が不利のようであるが、結果として後者の社会は崩壊した。情報共有社会が一部の人間による情報独占社会より堅固であったのである。一方、情報を公開することの危険について、人類は古代から警告してきた。知恵の果实を試食したアダムとイブが楽園を追放される旧約聖書の物語、竖琴の名手オルフェウスが死亡した愛妻エウリディーケを奪還するため冥府に向き、あと一步のところまで振り返り失敗するギリシャ神話、同様の筋書きのイザナギとイザナミの日本古代の神話など、世界の多数の民族に知識の獲得のもたらす不幸の警告が伝承されている。

この矛盾する問題を解決する重要な概念はリテラシーである。かつて識字と翻訳されていたが、情報の意味や役割を社会の背景を反映して理解する能力である。ブータンの先代国王は「国民の知恵と良識を信ずる」として、テレビジョンとインターネットを解放されたが、一時の現象にしる、国民は情報に翻弄されている気配である。日本国民もリテラシーを涵養することが情報社会を健全に維持するための急務である。